

「第二十八回庭野平和賞」贈呈式 名誉会長ご挨拶

本日は、「第二十八回庭野平和賞」の贈呈式にあたり、近畿宗教連盟理事長・大本山相国寺塔頭たっちゅう光源院住職・荒木元悦様げんえつをはじめ、多くのご来賓のご臨席を賜り、あつく御礼申し上げます。

今年度の庭野平和賞を、タイの在家仏教指導者であり、「仏教者国際連帯会議（略称、INEB II アイネブ）」の共同創設者であられるスラック・シワラック氏にお贈りできますことは、当財団にとりまして大変光栄なことであります。

今年の贈呈式は、当初、五月十九日に東京で開催する予定でございました。しかし、三月十一日に東日本大震災が起きたことから、その影響等を考慮して本日に延期し、会場も京都に変更致しました。

受賞者のスラック氏をはじめ、会場においでの方々は、大震災に伴う贈呈式の延期という特殊な事情の中にもかかわらず、本日、こうして大勢の方々がご参加くださいました。

誠にありがとうございます。

皆さまの中にもご存知の方がおられると思いますが、スラック氏は、知性的であると同時に、非常に情熱的で、強力なエネルギーを感じさせる方であります。私は、WCRP（世界宗教者平和会議）の活動に参画しておりますが、スラック氏も、その国際会議にたびたび出席されています。そして議

論の場になりますと、常に貧しい人々の立場に立って発言され、宗教者が積極的に社会参画することの重要性を訴えておられました。長年におよぶ実践に裏づけられた提言は、世界の諸宗教者に貴重な示唆を与え続けております。

また、スラック氏は、在家の仏教指導者としての立場だけでなく、弁護士、教師、学者、作家、活動家として活躍され、その分野も、宗教、文化、教育、環境、社会正義や公共福祉など、非常に多岐にわたります。

とりわけ一九八九年には、スラック氏と日本の僧侶であられる丸山照雄師の提唱によって、タイに「仏教者国際連帯会議（INEB II アイネブ）」を設立されました。

「INEB II アイネブ」では、仏教原理に基づく公正で平和な社会の実現を目指し、平和・人権・環境などに関わる政策提言をはじめ、行動する仏教者のネットワーク構築、出版活動、人材育成などを行ってまいります。

ここで残念なご報告をしなければなりません、「INEB II アイネブ」の共同創設者であられる丸山照雄師は、六月十三日、ご逝去されました。生前のご功績に深く敬意を表すると共に、衷心よりご冥福をお祈りしたいと存じます。

さて只今、スラック氏の活動が、大変幅広い分野に及ぶことをご紹介しました。しかしそこには、共通する一つのテーマがあることに気づきます。それは、「本当の豊かさとは何か」という根源的な問いかけであろうと思います。

第二次世界大戦後、アジアの国々は、西洋の先進国を模倣し、高い経済成長の道を目指してまいりました。日本は、その筆頭格でございました。

このような歩みは、人々の物質的な欲望を満たす一方、格差の拡大、環境破壊、心の荒廃など、数々の深刻な課題を生み出してきたと指摘されています。

これに対し、スラック氏は、「人々が貪欲に突き動かされている限り、人間社会の真の発展は実現しない」と警鐘を鳴らしておられます。

そして、次のような貴重な提言をなさっています。

第一は、「暴力、消費主義、物質主義、中央集権主義などを助長する西洋的な開発モデルを無批判に受け入れることから目覚めること」であります。

第二には、「自分たちの文化的ルーツの価値を自覚すること。つまり先祖や土着の文化に敬意を払い、そうした伝統的価値観を現代及び未来に適用すること」です。

また国際的なレベルでは、「内面を発展させることに、もっと注目するよう西洋人に働きかけること。つまり個人の変化は、社会の変化につながるものであり、そのためには、内面の平和を実現する必要がある」と訴えられています。

さらには、「仏教が今日有効であるためには、それが現実の産業社会に適用でき、地球規模の問題に対しても応えられるものでなければならぬ」と指摘しておられます。

『Think Globally Act Locally』（地球規模で考え、足元から行動する）という言葉があります。まさにスラック氏は、たぐいまれな叡智によって、世界的な課題を正確に見抜かれ、今後、アジアの人々がどのような道を歩んでいけばよいかを明確に指し示してこられました。

その原理と実践方法の根幹には、仏教があります。スラック氏は、「活動家」としても高く評価されていますが、何より

も、真の「求道者」であることを思い知るのであります。

スラック氏の数々の提言は、主にタイの人々へ向けられたものといわれますが、それはそのまま日本に当てはまります。日本は、戦後六十数年の間に、世界でも有数の経済大国に成長しました。そのような中であって、いつしか根本的なことを忘れがちになり、消費主義、物質主義に陥るきらいがありました。数々の課題も浮きぼりになっております。

そして今、千年に一度、五百年に一度といわれる大規模な地震と津波に襲われたのであります。直接の被災地ではない東京でも、電力不足、モノ不足などから不安感が高まっております。

その一方、注目すべき変化も見られます。節電により照明の減った薄暗い街を歩きながら、今までの明るさが尋常でなかったことを知った人も大勢います。不必要な電力を使わない新たな習慣も生まれ始めています。なるべく外食を控え、昼は家から弁当を持って行き、夜は家で食事をするという人も増えていきます。家族や隣近所の大切さを見直す機運も芽生えています。

今回の震災は、私ども日本人に、今一度、根本に立ち返り、生き方を正しくとらえ直すよう問いかけているように思えます。

そして、皮肉なことです。これほど大規模な震災に見舞われて初めて、日本人は、少しずつ人間らしさを取り戻しつつあるといえるのかもしれませんが。

古くから日本人は、必要なものは具えながらも、無駄を省くという簡素な生き方を志し、分かち合い、支え合う生活を

大切にしてきました。

また日本は古代、国名を「大和（やまと）」と定められたことがあります。我々の祖先は、いわば「大いなる平和」「大いなる調和」の精神を終始一貫することを国家的理想としていたのであります。

スラック氏のご指摘のように、自分たちの文化的ルーツの価値を自覚し、現代及び未来に適用することは、私どもの重要な使命でありましょう。

人間はどんなに物質に恵まれようとも、満足する、という心を持っていない限り、幸福になることはありません。いま授かっているものに感謝する「足ることを知る心」を一人ひとりに根づかせることこそが、「本当の豊かさ」の第一歩であることを、改めて気づかせて頂いた次第であります。

東日本大震災が起きて四カ月余。日本人の生き方を根本から問い直すことが迫られている時期に、スラック氏が来日され、庭野平和賞の贈呈式が行われることに、私は、特別な意味合いを感じております。後ほどの記念講演を通して、一層学びを深めてまいりたいと存じます。

本日の贈呈式を契機として、スラック氏の願いと行動を、より多くの人々が共有することを期待し、またスラック氏が一層ご活躍くださることを祈念して、挨拶と致します。

ありがとうございました。